

松平文庫本『西行発心物語』の解題と翻刻（下）

蔡 佩青・今井 亨

一、国語学的解題

本文献は、親本をかなり正確に受け継いだ、中世後期の言語的性格を有するものであると見られる。まずは、今後の資料性の解明に参考となりそうな表記・語句例について、簡単に触れておきたい。

なお、「・」の下に太字で掲げた『西行発心物語』の用例には、意味を取りやすくするために清濁を示した。

1、書写の面

補入・異本注記等が散見される一方で、擦消や重書による訂正は全丁にわたって五〇箇所以上に及ぶ。また、一行に収めるべき文字を気にかけてかのような筆の運び——文字の大小や文字間の広狭——が行末に向けて目立つほか、次のような不自然な空白が存する。

・なくあひだ面おびたしく■血（下24ウ10）

行末近く■に、二字分の空白が存する。「（西行がかしらをなさけ）なくあひだ面おびたしく■血（たりにけり）」という一文だが、これでは意味不通。学習院本「なさけなくうつ間」であることなどから、「なく」の後に本来二字「うつ」があるべきところを脱したものと思われる。

・田太郎俊衡樋爪五郎■衡とて子息（下45オ9）
■に一字分の空白がある。本来「季」があるべきところ。
いずれも、転写のどの段階で脱したかは判じかねるが、本書写者は本文の校訂には積極的に関与せず、親本を体裁のままに写そうとしたようである。

2、音韻・表記の面

四つ仮名の混同、合拗音の直音化といった近世的特徴を示す音韻・表記の例は見られないが、ただ、オ段長音の開合の乱れと見られる表記例が一例存する。

・いはつとふらん（上36ウ2）

和歌の一部。学習院本・文明本・山家集諸本いずれも「つたふ」である。

・眷属どもさこそかなしかりけんめ（下14オ3）

「けん」の已然形にあたるものか。学習院本「さこそかなしかりけめ」である。

3、文法・語彙の面

A 係り結びの乱れ

・さだめてさこそあらんずらん（上2ウ10）

・うぐひすの声ぞ霞にもれてけり（上13オ9）

和歌の一部。学習院本・山家集諸本「もれてくる」、文明本「もれてける」である。

・袖をぞしほりけり（上19オ5）

学習院本「袂タモトをしほりけり」である。

・まことにぞなりけり（下11ウ5）

学習院本「誠にそ有ける」であり、補助動詞「あり」の用法も適格である。

B 接続の乱れ

・このめばをのづから発心すいはれあり（上26ウ4）

本来サ変動詞であるから連体形「発心する」とあるべきところ。往生講式「人非ニ木石ニ好自発心」（『大正新修大蔵経』第八四卷、p880）をもとにした表現で、宝物集や撰集抄等にも見える成句。学習院本はこの前後約一九行分を脱する。

・すみぞめの袖ぐちはぬる心地して（上41ウ10）

「濡る」なら本来う行下二段活用であるから連体形「ぬるる」とあるべきところ。踊り字を脱したか。学習院本「墨染の袖ぐちはてぬる心ちして」である。

・我子なればや思はるゝらん（下4オ9）

助動詞「らん」は本来終止形接続であるから「思はるらん」とあるべきところ。学習院本「わか子なればや俤の」である。

・後の世のくるしみをすてさしめむ（下20ウ4）

本来「すてさせむ」あるいは「すてしめむ」とあるべきところ。「…

さしむ」は散見される破格例のようで、『角川古語大辞典』（「しむ」

項）に、うつほ物語・後拾遺集・今昔物語集・平家物語の例が挙がる。学習院本「すてさしめん」である。

・といはる事の（下31オ4）

受身・尊敬の助動詞「る」なら本来連体形で接続するから「いはるる」とあるべきところ。学習院本「といへることの」である。「と」の上には、和漢朗詠集（岩波『日本古典文学大系』・底本は御物伝藤原行成筆粘葉本）「宜うべなり愁うれひの字じをもて秋の心あきこころに作つくれること」（小野篁・224）をふまえたと思われる表現を引く。

C 新奇語彙

・ことにぎしめきてまいりたりければ（上21ウ3）

先行する「いそぎ鳥羽殿へまいりける」（上19オ9）、「はやきひづめにむちをあげ鳥羽殿へまいりける」（上20ウ9）と一連の表現。『日本国語大辞典』第二版「ぎしめく」項の②「りきむ。勢を張る。いきばる」（仮名草子は樂物語（1955-58）を挙例）の意にあたるか。学習院本「きしめきてまいりたりければ」、文明本「ことにきらめきてまいりたりければ」である。

・御まびきにかゝらん事も（上22ウ1）

慣用句。学習院本「御まなしりにかゝらん事も」、文明本「御まなしりにかゝらむことも」である。「まなしりにかかる」は『角川古語大辞典』に撰集抄・曾我物語の例が挙がる。

・花の下の好客月のまへのしづめ人につらならん事も（上22ウ9）

学習院本「花下の行客月カウカクのまへ閑人カンジンつてならぬ事を」である。「閑人」

を訓に読んだものと見られる。

・はやく殺罪をまぬかしてすみやかに都にむかへて（上54ウ4）

自動詞「まぬかる」に対する他動詞と見られる。学習院本「早敬罪免速都城迎へ」である。

・胡馬北風に**いばひ**越鳥南枝にすをくふ（下14オ6）

室町時代に四段活用「いばふ」が生じたとされ、『古語大鑑』は飛鳥井雅世集・草根集（用例出典一覽）に記載ないか、『私家集大成5・中世Ⅲ』だと底本は書陵部蔵十七冊本・江戸初期写）・日葡辞書、『角川古語大辞典』は本門寺本曾我物語・エソホ物語の例を挙げる。

他に、文明本節用集「越鳥」項の注記「句云胡馬嘶北風越鳥巢南枝」（中田祝夫著『改訂新版文明本節用集研究並びに索引』影印篇、勉誠出版、二〇〇六年五月、p701）や、学習院大学図書館蔵（九条家旧蔵）本平治物語「胡馬北風に嘶、越鳥南枝に巢をかくる」（江戸初期写、下二三オ9、『保元物語・平治物語 日本古典文学影印叢刊23』日本古典文学会、一九八八年五月、岩波『新日本古典文学大系』2333）等にも見える。学習院本「故馬北風にいはへ越鳥南枝にすくう」である。

・其後時々御物忌たてられし事も中たふる事にてありける（下20オ1）
動詞活用行の混乱により「絶ゆ」から生じた語。学習院本「たゆる」である。『日本国語大辞典』第二版は愚管抄（1220）の例を挙げる。

D 漢文訓読語系語彙

・まことに見るもすずしく身の毛もよだちてぞおぼえける（上46ウ6）
いざなわれた「所のありさま」について、「山ことにそびえて鷲の嶺

のいきほひをうつし峰しかも嵯峨として鶏足のよそほひをあざけ」るがごとき様子を形容しており、「すずし」が対象の状態を表す訓読語系特有の用法。ちなみに「あざける」も訓読語系語彙。学習院本「誠に見るもすさまじく身のけもよだちておほえけり」である。

・同廿三日に花山寺にして御かざりをおろさせ給ひて（上43ウ7）

場所を表す格助詞として訓読語系の「にして」を用いる一方で、「此岩室にて往生をもとげまほしく」（上58ウ7）と和文語系の「にて」をも併用する。

※右に掲げた異同に関しては、「学習院本」異本西行記と「文明本」西行物語は国文学研究資料館マイクロ写真の複写、「山家集諸本」は寺澤行忠編著『山家集の校本と研究』（笠間書院、一九九三年三月）に、それぞれ拠った。

二、翻刻

【凡例】

- ・本稿は、肥前島原松平文庫所蔵『西行発心物語』全二冊のうちの上册を、原本に拠ってできるかぎり忠実に翻刻したものである。
- ・原本の一行をそのまま一行とし、丁数をその丁の最後の行末に「」（1オ）」のように示した。
- ・漢字・仮名の区別をはじめ、仮名遣い、振り仮名、当て字などは、すべて原本どおりとした。
- ・平仮名・片仮名は、現行の字体に改めた。
- ・漢字の字体は、異体字・略体字ともに通行の字体に改めたほか、次の漢字は同義とされる通行の漢字に改めた。
- 菴↓庵 姪↓淫 悋↓希 无↓無 鷲↓燕
- ・「地」「日」「見」「身」「屋」「為」など平仮名としても用いられているが、意味のうえから漢字として通じるものは、漢字とした。
- ・意味上、誤字・脱字などとみられるものは、そのまま翻刻し、右傍に「（ママ）」と注記した。
- ・字形が不整であるなどして判読の難しい文字は、試みに翻刻し、「（カ）」と注

- ・記した。
- ・踊り字（繰り返し符号）は、「ゝ」「ミ」「く」は区別して、「ミ」は「タ」に改めた。
- ・見せ消ちは、右傍に「ニ」と示した。
- ・見せ消ちの右傍に補訂された文字は、「三」の下に小字で示した。
- ・朱筆の補入の小書き文字は、原本の体裁にしたがって右傍に小字で示し、「（朱）」と注記した。
- ・補入位置を記して補入された文字は、位置を「ニ」と示し、その右傍に小書きで示した。
- ・異本注記、傍に訂正・補入された小書き文字は、原本の体裁にしたがって小字で示した。
- ・和歌は、改行二字下げに書き始め、原本とおりの体裁とした。

西行発心物語下

本より心さしふかき事にてすみよしに
まいりておかみ奉るにおきの浪きしを
あらひ松の梢ことをしらへてよろつ
あはれに侍りけるに源三位頼政卿月
おちかゝるあはちしま山とよみけん
もことはりとおほえて松のしつえを
あらひけん浪いまの心地してかくそ
よみける

すみよしの松のねあらふ浪の音を」（1オ）

梢にかくるおきのしほかせ

いにしへの松のしつえをあらひけん

浪をこすゑにかけてこそみれ

其年は住吉にこもりて帰る年都へ
行けるか難波のかたをなかめければ

うらちはるかに霞こめてあまのつり船
ほのみえて跡の白波きえ行もうき世
のためしとおほえてあしのかれ葉をさ
そふ風殊に身にしむ心地して

つの国のなにはの春は夢なれや」（1ウ）

あしのかれはに風わたるなり

さすかにしなぬ命なれは行めぐりて又き
うりに帰来てさすらひありく事の

我身なから我身とおほえすそありけ

るしかるにありしかたほとりを来て

見れは昔なれしたしみしともからを

尋ぬれは皆大方はうき世をそむき其名

はかりそとゝまれるすみしいほりも

ことなるさまになりはてて何をやとゝさ

ためたれをたのみて玉ゆらのたより」（2オ）

とすへしとおほえすかの水江の浦島^か

蓬萊宮におもむきて千秋のたのしみ

にあへりしかきうりをわすられて丹

後の国余謝の郡に帰てあけてくやし

き箱の浪ひたひによせて身をうつ

し剡懸隆晟院のあやしみに

はかされて仙洞に入しに旧里を恋る

涙切にしてなこりを絃歌にとゝめて

旧里にきたりしにありし所も木

しけき山もなりはてゝ半年ををく」(2ウ)
るとおもひしに七世の孫にあへりけんも
是ならんといとゝかきくらす心地してかく
そよみける

むかし見し庭の小松にとしふりて
嵐のをとをこすゑにはきく

いつくにもすまれすはたゝすまであらん
柴のいほりのしはしなき世に

昔見なれたりし事なれば法勝寺の

花見にまかりたりけるに上西門院の

女房兵衛のもとへいかにむかしの」(3オ)

花見の御幸思ひ出て心ほそくおほし
めすらんにてことさら今日雨ふりて
侍る事の物かなしくおほえてそつか
はしける

見る人に花もむかしを思ひ出て

こひしかるらしあめにしほるゝ

返し

いにしへをしのふる雨とたれかみん

花もむかしのともしなければ

かくさすらひありく程にすみなれし」(3ウ)

ふるさとの事もさすかにわすれかたくて

我けおとしたりし娘の事も心に

かゝりて其ほとりをすきけるに門の

内を見入て立たりければこの娘五六
はかりにてしとみのもとにゐてつち
あそひしてありけるをつくゝと

あはれに見るほとに娘これを見て門に

こつしきの見るかおそろしきにとて

うちへかくれぬ我子なればや思はるゝ

らんふりわけかみもかたすきてうち」(4オ)

思ひたるかほけしきいふかひなくもおほ

えねはたゝひとりすみそめの袖をそし

ほりけるかゝるありさまみるにつけ

てもよしなき事とは思へともそのた

めしなきにもあらずおやこの契あさ

からぬ事なればこそ尺迦如来も羅睺

羅と申せし御子をは母のやしゆたら

のもとよりとりよせてあなんそんし

やにおほせつけてかみをそりけさ

をさつけて御ねはんの時にはかすの」(4ウ)

御てしにむかひ奉りてかたしけなくも紫

金のたな心にあはせて羅睺羅にいとお

しみをくはへてたへとはおほせられけめ

生死のきつなとは思へともわすれかたき

はおんあひのみちなりされはこそ仏の

衆生をあはれみ給ふたとへには一子平

等とはのたまへれ大方はみぬよりほか

のちしきあらずと思ひて山ふかきこゝ
ろのみいよくすゝまれて

山ふかくさこそこゝろはかよふとも」（5オ）

すまてあはれをしらん物かは

世をそむきしより後は何事もいろはし
と思ひけるきさみに建春門院の少納言
西行か家に集をかきて帰りける文のお
くにかくそ申たりける

さてことに玉のこえせしたまつさの

たくひはまたもありける物を

返し

よしさらはひかりなくとも玉といひて

こと葉のちりは君みかゝなん」（5ウ）

世にありし昔あさからす申承し人の

憲清出家して出ける時友にさまをかへ

一仏浄土の契をむすひて西行西住と

て二人ありけりある時西住かいひける

は頭陀は是けうまんのはたほこをた

をしほたいの道に入はしめ也され

は過去の仏より今の尺尊にいたり給

まていつれの仏いつれのほさつしやう

もんか是をすゝめさりし此行をにく

まむ事はひとへに是三途のさいしやう」（6オ）

いまたつきすして心の仏道にいらさる

かゆへ也中にも我等か本師尺尊は種姓
をいへは刹帝利子頼王には御孫浄飯

大王^ニは太子也五天竺の間には誰かこの

人をいやしき人といはんきとくをいへは

三界の導師十善のあるし也南閻

浮提の内にはたれか此人をさとりなし

とあさむかんや汝ら家を出て仏道に入

給へともいまた仏世に出給し御様

をしり給はす耳をそはたてゝしつか」（6ウ）

に是をきゝ給へし浄飯王の後摩耶夫

人と云人白馬をふところへいたき給と

夢に御覧してたゝならぬ事に

ならせ給て四月八日藍毘尼園と云園

に出て無憂樹と云木の本にて花枝

をたをらむとて右の手をあけさせ給て

侍りしに左の御わきより御誕生あ

りて大光明をはなちて三千大千世界

をてらして身つから七歩し給て右御

手をさし上て天上天下唯吾独尊ととな」（7オ）

へ給しに難陀跋難陀等の竜王清浄の

水をくたして御身をきよめ奉り

釈提桓はてつから宝蓋をとり大梵天

王は身つから白払をもちて左右に

立給てこそ貴讃し奉りたまひしか

かくて何となく年月もはせすきて
御年十四と申けるに花の散木の葉のち
るを御覽してもさためなき世を覩し
此身を石火のひかりによそへてさりか
たき衰変をそかなしみ給ける十五歳」(7ウ)
と申ける二月八日百官万乗あつまりて
四大海水を取り太子の御いたゝきにそ
そきてさつけ奉るに宝印を仏も立
て国司とさため奉て十七歳と申せし
に瞿夷鹿野耶輒多羅とて三人の
后をたてられき朝夕にあひなれ
給といへともいさなきいさなき^ゐのはしめ
わさもなかりき十九歳と申せし二
月十五日淨居天と云人きたりて出家
の時にいたれりとつけしかは 鳥」(8オ)
いまたつけすして月半になりしに
しやのくを御供にて驪馬にむちをあけ
跋迦仙人と云人のすみける苦行林と云
林の中にわけ入て身つから利剣を
とりもち御かさりをそりおとしはし
めて不用巡定をならひ給き廿歳と申
せしに阿藍迦藍仙人にしたかひ
て無所有所定を修し給廿五歳にして
尼連河のほとりにしてもろくの

難行苦行をこらして卅一歳と申せ」(8ウ)
し二月七日夜卅六億の魔軍を降伏し
給大光明をはなちてすなはち禪定に
入給八日の暁正覺を成給きなつて
世尊と申き仏の本意本より大乘に
おはしまししかは地住已上の人にむかひて
華嚴經を説き卅二歳より阿嚴經
を説憂棲頻螺迦葉をはしめて一
千人出家して尺尊の御弟子と成にき
卅五歳と申せしに摩謁陀国の迦陵
長者と云人竹園と云そのに寺を立て」(9オ)
仏に奉る舍利弗目連等の二百五十人
得度の化をそうけ給ける卅六と申せ
しに舍衛国の須達長者と云人祇園
国と云所に寺をつくり仏に奉る仏
かしこにしてもろくの御弟子と室
羅筏城に出給毎日の午の時に民のかまと
にましはりて貴賤をえらはす無差
平等の慈悲にして頭陀をつとめ給て
福業の種子を衆生にあたへ給き如此
して成道より以来十二年の間十六」(9ウ)
の大国にして法を説利生をたれ給き
四十三よりは方等部の經を説五十一歳
よりは般若を説給き御年六十と申せ

しに阿難尊者をめしよせて鷲峰

山にして法花を説給ふかくて御年七十九と申けるに周穆王五十三年壬申年二月十五日曉拘尸郡国跋提河のほとり沙羅林の本にして面輪謁正の月のかはせは非滅のかすみにまかひ紫摩黄金の生容は梅檀のけふりとた」(10オ)

なひきまし／＼き是ほとにめてたくお

はせし仏なを頭陀をつとめて衆生を

あはれみ給ひきねかはくは我等かの

須菩提迦葉浄名居士にいさめられ

し事を思ひしり二心なう一枝一草

の供養也ともあたへられ後の世の福業

の種子をもきさゝむと思ふ也汝と

我黒業の家にありしより彼漢家の

范式と張元とかむつひをたかへすあり

けんと此世ならぬ事也といひければ」(10ウ)

西行悦てまことに我等世をすてたるし

るしには名聞をなけすてゝひとへに

仏道をもとめんためなりつれなかり

し心の程をもきめすへしと申て二人

うちつれて都のほとりにたちいてゝ

富るまつしきをきはす門をかそへて

めぐりけり西住かむかしすみける家の

ほとりに立より門の間にたゝすみ乞

食をするほとにあさからすいとおし

かかりしみとり子の手あそひして立」(11オ)

たりけるか是を見て申様門に立たる

ひしりの我か父ににたるよとてめのと

につけてなきけるをまことゝは思はねと

もおもはさる外の事もあるそかしと

思ひて立出て見ければまことにそなり

けりさしもはち思へるけしきもなく

て立たりけり年来のつまにてあり

しものは是を見てわかれし後はいま

までもなけきの色うすく成にはあら

ねともいまさらかなしき事をみつる」(11ウ)

かなとてひきかつきてふしにける

おほろけの事にても思ひ立たるに

あらされはとかく云にをよはすしはらく

はあきれてありしかともむなしく

あるへきならねはぬりをけのふたにし

ろきよねを入てとらせければ西住こ

れをうけとりて門の外に出けるか

昔ちかくつけつかへし者とも声を

おしますなきけるを聞て西住袖を

面におほひて見るしき程になきけれ」(12オ)

は西行是をみていひけるはくちおしく

も心よはくおはする物かな是ほと心の心に
て我をいさなひ乞食せんとはおほせられ
ける事のはかなさよされはこそすきに
し時つゐのともになうましはなれ
奉らんと申せしは心よはき御心を
見たてまつりて申せし也昔よりい
まにいたるまで心よはくて生死をは
なるゝ人誰かありしされは雪山童子
は半偈のために身をなけ薩埵王」(12ウ)
子は飢たる虎に身をあたへ大施太子は
たからをなけてのそみし物にほとこし
忍辱の仙人は手足をきられしかとも
くゆる心なく尸毘大王は鳩にかへてしゝ
むらをさきはかりにかく如此してこそ
つゐに正覺を成て果満の如来とはい
はれ給しか皆是心よはくなきかゆへ
なり若契し事もくちすは後の世
にはかならず一蓮にやとるへし
とて行わかれける事こそあはれ」(13オ)
にはおほゆれまことに名聞を思ひすて
て道心のふかゝらんには乞食こそいみ
しき事なれしかりといへとも此人も世
にありし古は須達か玉のうてなもみ
かきし程こそあらさりしかとも范

冊^マか五色の水に魚を生せしにはにさ
りき六畜八産のたすけともしから
さりし人のこきすみそめに身を
やつしあらぬすまゐになれりし
をこそあへなき事にはおもひし」(13ウ)
におもはさる外の乞食に来れるを見て
年比の妻なれしたしみし眷属ともさ
こそかなしかりけんめなけきけんもこ
とはりなれは西住もいかてかむかしの
なしみはたちまちにわするへき胡馬
北風にいはひ越鳥南枝にすをくふと
いひて鳥けた物にいたるまでも生出
をわすれず古里を恋るおもひありま
して人としていかてかこのおもひを
たえんやかゝるありさまをみるにつけ」(14オ)
ても西行は恩愛のきつなとをさかりぬる
事をそよろこひける日もくれかた
に成にければ庵りに帰りてありける
に入相のかねの声心ほそくきこえ
ければ
またれつる入相のかねの声すなり
あすもやあらはきかんとすらん
其暁月ことにあかりければ
山陰にすまぬこゝろはいかなれや

おしまれて入月もあるよに」(14ウ)

あか月のあらしにたくふかねの音を

心のそこにこたへてそきく

心つよく思ひきりてはありしかとも

西住かありし事もわすれす心にかゝりけるにや

山里の柴のいはりは人めにや

けには心かすまはこそあらめ

仁和寺の御室へめされてまいりたりけ

れはおほせ事に云和歌は無常をす

すむる源うれへをいとふしるへ也穢土」(15オ)

をいとひ浄土をねかふに歌詠の道さまたけ

にあらすされは聖徳太子は道のほとりの

うへ人にしてしてなてるやかたをか山の

なかめをたひ伝教大師は我立そまの

くちすさひし給きいにしへの権化

なをしかくのことしいかにいはんや我か

豊葦原の中津国の事わさなり

かたちをこゝにうけたらんたくひい

かてか是をすてんなにはの事か法なら

ぬしかるに人丸赤人かなかれをつた」(15ウ)

へて大和言をくちすさむ事たゝ

聖人はかり也同蓮の身とならんた

めに月の百首をすゝむる事あり結

縁せらるへきよしおほせくたされ

ければ十首の歌をそよみてまいら

せける

うれしとや待人ことにおもふらん

山のはいつる秋の夜の月

月の入山に心ををくりいれて

やみなるあとの身をいかにせん」(16オ)

夜もすから月こそ袖にやとりけれ

むかしの秋をおもひいつれは

ふけにける我身のかけを思ふにも

はるかに月のかたふきにけり

月をまつたかねの雲ははれにけり

こゝろあるへきはつ時雨かな

月のみやうはの空なるかたみにて

おもひも出はこゝろかはさん

すつとならほうき世をいとふしるしあらん

我身はくもれ秋の夜の月」(16ウ)

かくれなくもにすむ虫はみゆれとも

我からくもる秋の夜の月

ありあけは思ひ出あれやよこ雲の

たゝよはれつるしのゝめの空

しのはるゝ心や行と山のはに

しはしな入そ秋のよの月

おほせそむきかたきにて十首の歌

をよみ奉りたれば御感しきりに

ありけり西忍入道の西山のほとりに

すむときゝて秋のいかにおもしろかる」(17オ)

らん見まほしくこそと申たりける返

事に色ゝの花をおりて此歌をよみ

てをくりけり

しかのねや心ならねととゝむらん

さらては野辺をみな見する哉

返し

しかのたつ野辺のにしきのきれはしは

のこりおほかるこゝ地こそすれ

いつくをすみかともさためねは都もす

みうくおほえてあつまのかたへくたるへ」(17ウ)

きよし思ひ立て是より伊勢路にかゝり

て年比心さす事なれば大神宮へま

いらんとて旅のいとなみなんとして

出立ほとに年ころの郎等おとこのあり

けるかともに出家して侍りけるか

あなかちに共せんと申ければ西行

いひけるは実にはなれかたき恩愛をす

てゝもろともに家を出にし事は

心さしの程あらはれておほゆ我人を

かへり見したかへし事おほかりし」(18オ)

かともなんちかこゝく後まで心さしをわ

すれぬものはなしうれしとをろか

なりしかるに旅のならひおもはすの外

の事のみあれはもしとしてあへな

き事もあるならはたかひにみきかん

も心くるしき事なるへしこのたひ

の道つれはかなふましといひければ我

いとおしき子をもすてさりかたき

妻をもはなれて付奉りたる心さし

もおほしめさすすてさせ給事よ」(18ウ)

とてなきかなしみければ心ならずは思

へともこれ程思ふらんとはしらさき

まことに心さしの程うれしくとて二

人つれて下りけり鈴鹿山の気色

あはれにて

すゝか山うき世をよそにふりすてゝ

いかになり行我身なるらん

太神宮にまいりつきみもすそ河のほ

とり杉のむら立の中にわけ入て

一の鳥居ありおかみ奉にちはやふる」(19オ)

あけの玉かきかゝやきてうちすすみた

るありさま秋のあはれをかきあつめ

よろつ心ほそくそおほえける垂仁天皇

廿五年に天照太神のみことの法により

て伊勢の国度会郡五十鈴河のみなか

み一の勝地をしめして宮はしらふとしき立天照天神をいはひ奉り同天皇の御娘倭姫の命を齋宮に祝奉り

あまつ日つきをそなへてそ天か下をおさ

め給ける其後時ゝ御物忌たてられし」(19ウ)

事も中たふる事にてありける

嵯峨天皇の御時大同四年に仁子内親王

そたてられけるそれよりこのかたは

いまにたえさせ給はすとかや代々の

御門あさからすもてなし奉らせ給て

かたしけなくも宸筆をくたして

のそみをいのり申せ給とかや無縁の慈

悲にもよほされ本有法身の都を出て

衆生応同のかたちをしめし給ふたに

もかたしけなきにせめてのいつくしみ」(20オ)

のあまりにや光を扶桑の霞にましへ

てかたちをちりにうつみつゝ此たひす

こしの縁に仰として後の世のくるし

みをすてさしめむとおほしめしたる事

のありかたさよとにかくにそふ物は涙にて

すみそめの袖をそしほりける一度の

あゆみによりて二世ののそみをみてん事

のうれしくてかくそよみける

ふかく入て神ちのおくを尋れは

またうへもなきみねのまつ風」(20ウ)

みやはしらしたつ岩ねにしきたてゝ

つゆもくもらぬひのみかけかな

峰の木からししきりにおろせはみもすそ

河の浪きはをあらひゐかきの杉に立よれ

は千年のみとり身にしみて催馬楽の

声心すみおなし空行月なれといかに

この砌は木の葉かくれの^もことにさやか成
らんとて

神ち山月さやかなるちかひありて

あめのしたをはてらす也けり」(21オ)

さかきはにこゝろをかけんゆふしてを

おもへは神もほとけなりけり

いつもつゐのすみかならねはいてまほし

くは思へとも天照太神の御法をもたの

み奉り後の世の事をも申さんとして

二見の浦と云所に庵りをむすひてす

む事にてそありけるつねには輔弘の

祭主のよみたりし玉くしけ二見の

浦のかひしけみまきゑにみゆるまつの

むらたちはをなかめてそなくさみ」(21ウ)

ける霞たなひき月の色もかすかなり

ければ

おもひきやふたみの浦の月をみて

あけくれ袖になみかけんとは

浪こすとふたみのうらにみえつるは

梢にかゝるかすみなりけり

花のさかりに成ぬれは神ちの桜吉野山

にもましておほえけるにみもすそ川

のほとりに神官ともあつまりて花の

下にてなかめけるに」(22オ)

岩戸あくるあまとみことのそのかみに

さくらをたれかうへはしめけん

神ち山見しめにこもる花さかり

こはいかはかりうれしかるらん

風の宮の花ことにわりなくしておほえけ

れは

この春は花もおしまてよそならん

こゝろを風のみやにまかせて

月よみのみやにまいりたりければま

ことになにしおひてことさら月のひか」(22ウ)

りもくまなく花のこすゑも心ほそくお

ほえて

さやかなるわしのたかねの雲間より

影やはらくる月よみのもり

わしの山月を入ぬとみる人は

くらきにまよふこゝろなりけり

梢みれは秋にかきらぬなゝりけり

花おもしろき月よみのもり

桜の宮の梢の花風にたはふれてとひ

あそひ花の木の下は雪のつもるかとおほ」(23オ)

えておもしろかりければ

ちるを見てかへるこゝろやさくら花

むかしにかはるこゝろなるらん

神風に心やすくそまかせける

さくらのみやの花のさかりを

さてもあつまのかたの修行思ひ立て下し

かとも何となく名残おしき心地し

てありけれども此所にたゝすみて

昨日今日と思へとも三年あまりにも

成にけりさのみ此所に心をとゝめん事」(23ウ)

命の程もしりかたければあつまへ下

へしとてすてにしければ契あそひ

し人々来りて夜もすから名残をお

しみなさを絃歌の曲にとゝめて

袖をしほりけるにことさら月のあかか

りければ

めくりあはて雲ゐのよそに成ぬとも

月になれ行むつひわするな

きみもとへ我もしのはんさきたゝは

月をかたみにおもひいてつゝ」(24オ)

か様になかめつゝあつまのかたへ行程に

日数ふれは遠江国天竜のわたりにて
ある武士のわたりける船にのりてす
てに船を出さんとしけるにおほくこ
みのりてあやうき事にやありけん
あの法しおりよくとたひくいひ
けれども渡のならひなれはおりますと
もなれと思ひなそらへてあるほとに
むちをもちて西行かかしらをなさけ
なくあひた面おひたしく 血（24ウ）
たりにけりされともうらみたるけしき
もなく船よりおりにけりこの
ともなる入道是をみて見くるしき
程そなきかなしむ西行つくくと
まほりていひけるは都を出し時いかに
も道のおひたにて心くるしき事とも
あらん時はたかひに見きかん事もよし
なしと申せしは是也手足をき
られ食をうしなはるゝ事ありとも
悔る思ひあるへからず若昔の心をもつ（25オ）
へくはかみをそり衣をそめてなにかに
せん我家を出しより思ひきためたる
事も返々もろかなり我ともになか
ふましとていとま給はらせてわかれに
けり彼提婆達多か逆罪をおかせし

天王如来の記剎をうけ四衆のともから
の不軽ぼさつを打罵し衣のたまをあ
らはしきみな是たをるゝ物の地をは
なれずしてをくるかことしねかはくは
我今日彼うたれぬる縁をもちて（25ウ）
さきたちて仏にならん時は彼ともから
をみちひくへしとそいひけるされは
空也上人のつねのことくさには慈悲の
無漏ふかけれは罵詈誹謗をもきは
すにんにくの衣あつけられは杖木瓦石
をもいたますとおほられけるとかや
まことにまめやかか道の心をこりな
罵打とも何とくるしからんさりなから
もこの人最初世にありし時は弓箭を
脇はさみいさむ芸人にすくれ剣戦をお（26オ）
さむる能世に同じきたくひなかりき彼
田単鎌絵を牛にきせて陣平か国を
ほろほし郅都が雁門の太守にうつ
されて辺夷をしへたけすかたを
石にちりはめられしにもまさりたり
しかは威をふるひとくをほとこし給し
事あへてならふやからなかりきかゝり
し人のいふかひなき物にさんくゝに
うたるれとも露ちりはかりうらみたる

けしきもなくてありけるをともの法」(26ウ)

師見てなきけんもにくからぬ事そかし

かくてたゝひとりさやのなか山をこえけるに
よに心ほそくおほえければ

としたけて又こゆへしと思ひきや

命なりけりさやのなか山

かくうちなめて行程に初秋風身にし

みていつしか野辺のけしきも事あり

かほにうちかはりて虫の声さへよはり

つゝたかことつてをいふやらんこし路のか

りもとつれて心ほそかりければ」(27オ)

秋たつと人はつけねとしられけり

みやまのすその風のけしきに

おほつかな秋はいかなるゆへのあれば

すそろに物のかなしかるらん

しら雲にはねうちかはしとふかりの

かとたのおものともよはふなり

昔業平の中将のつたやかつらに道

まかひ夢にも人にあはす成行となかめ

けんうつ山をこえけるにせきの

浪みきはをあらひ月のひかり水に」(27ウ)

かゝやきてよろつあはれにおほえて涙も

かきあへぬ程なりければ

きよみかたおきの岩こすしら波に

ひかりをかはす秋のよの月

よろつにつけてあはれまさりて行

程に駿河の国うき島か原もすきけるに

さてもくわか身のはていかならん

すらんいつれの里いかなる野辺の

草の下にて露ときえんすらんと思ひ

つゝけてふしのたかねをみわたせは」(28オ)

けふりすこくたちわたり物かなしく

そおほえける山ことに嵯峨として楞

伽台嶺のいきほをあさけりふもとに

湖水たゝへて白鷺池の浪をたゝめ

り南に郊原ありて鹿野園の鹿

の声よりも無常をすゝむる事あり

き前には蒼海まんくとして

あまのつり舟ほのみえて彼大公望か

渭浜の浪に船をうかへ釣魚のたすけを

すゝめし文王のかりにあへりけん」(28ウ)

もみる心地して都を出しより此かた

道のほとりまなこのをよふ所は山河潮江

の間にかすをつくしてみしかとも是

ほとに眺望やさしき所なしこれより

ひかしあつまのおくにもかゝるたく

ひありもやすらんなくもやあるらむ

とそおほえけるよろつ旅のあはれ

秋のかなしみ浪の音けふりの色かき
あつめて心をくたかすと云事なかり
きあはれにあはれをそへておほえけ」(29オ)
れは

いとなき思ひはふしのけふりにて

うちふすほとにうきしまかはら

かくうちなかれて行程にあしから山の

氣色心ほそくて白露山深し鳥の一

声といひけん人の事も思ひ出られ

て事としてあはれをまし涙をす

すめすと云事なかりしにおりし

りかほに木嵐の身にしみて物かなしく

ありければ」(29ウ)

山里は秋のすゑにそおもひしる

かなしかりけり木嵐の風

かくのことくうちなかれて行ほとにせき

もとさかはなんと云所をもすきしかは

さかみの国大庭と云所にとかみかはらと

云所をすきけるにつまよふ鹿の身も

つかれたるけしきして松のしけみに

みえければ

しは松のまくすのしけみつまこめて

とかみかはらにをしかなくなり」(30オ)

其夕暮にことに心ほそくてありけるか

風の氣色も事ありかほに身にしみ
てなれしあふきもひまありて目には
さやかに見えねとも風の音さへあはれに
てしきたつさはの氣色もなく(マ)てならす
かなしくて

心なき身にもあはれはしられけり

しきたつさはの秋のゆふくれ

秋のあはれむしの声筆もをよはぬ事

なれとも峰にはにしきをはりくさ」(30ウ)

の葉玉をむすひ月のひかりも袖の涙に

うつりかりかねの声こしちの風をとも

なひてむへなるかなやうれへの字をかき

て秋の心をつくるといはる事(マ)のけにと

おほえてかくなん

よこ雲の風にわかるゝしのゝめに

山とひこゆるはつかりの声

しらさりし雲ゐのよそにみし月の

影をたもとにやとすへしとは

いつくをさして心さすとなければ月」(31オ)

のひかりにさそはれてはるゝとむさし

野のほとりへわかち入ほとに尾花の

露にやとる月末こす風に玉ちりて

小萩かはらになくむしの袖になみたを

つらねつゝたつぬる雲のいろなれば草

のゆかりもなつかしくをのつから
昼も心すみければ花のにしきに

立よりて雲ゐの月をなかむるに道

より五六町はかりさし入て風に法花

経読誦の声心すこくきこえて人里」(31ウ)

は目中はかり行てあるとこそいひし

にこはいかなる事やらんとうちおとろ

き声をしるへにて尋入てみればわ

つかにかたまはかりの庵りをむすひ

てすすきかるかやにてうへをはふき

萩女郎花にてめくりをはかこひて夜

ふすゆかとおほえて東によりて

わらひのほとろをしき西のかへには

絵像の普賢をかけ奉りて御前には

八軸の妙文ををきたてまつれり」(32オ)

南に下て谷のほとりに石をたゝみて水

をたゝへてひつしさるによりて

関伽棚をつくれり関伽桶に色々の花

なんとをたて庭のほとりには萩をみ

なへししけりあひていつこそ人かよへ

るともみえすしてうちには年九十

あまりはかりの僧眉に八字の霜たれ

こしにはあつさの弓をはりまことに

思ひ入たるありさまほかにあらはれて

我不愛身命但惜無上道とよみたて」(32ウ)

まつりまことに心すこく侍りき仙人

なんとのおすむやらんとあやしみ侍る

すゝみよりてあれともたかひにあきれ

たる気色にていふちからもなし八月

十五夜の事なれはひるのやうにてた

かひにかくれもなきにちかくよりつゝ

こはいかなる人のかくておはしますそ

ととへともとかくの返事もせさりけり

西行心もとなき事に思ひてかさねて

いひけるは我は是都のかたの者にて侍」(33オ)

るかむさしのゝ秋の気色古里にてきゝ

侍りしにあはれいつか心よく見る事に

てなんと思ひておりふしも月のくまな

きころなれははるゝと分入て侍に人

里ちかゝらぬ所にてかゝる御すまゐ

の貴さよ晋の郭文か心を山水の景

気にそめなして家路をわすれて日を

をくり潁川の許由か箕山のいほり

にこもり居て一瓢(マ)をすてけんありさま

といま見る心地して御ほとりの事も」(33ウ)

きかまほしくこそといひければ我は是

郁芳門院のさふらひの一廊にて侍り

しか彼院かくれさせたまひて後やかて

さまをかへしかるへき智識に思ひ奉りて
都の人くしられさん所にすみて
彼御ほたいをもとふらひ奉らんと思ひ
て国々にすみかをたつね侍りし程に
むさしのゝほとりは四季おりふしに
つけてなかめのたよりもつきすして
すまさる時なし春はやけのゝひはりさ」（34オ）
えつり四方の木草のつのくむけしきむら
さきの一本ゆへのうつり色とおほえ夏は
梢のひゝかすせみの声秋は萩女郎花虫
の声鹿のともよふ遠声身にしみ
つゝ冬はかれ野ゝすゝき風の音時として
心をもよほさすといふ事なしされは
霜草かれなんとすむしの思ひねんころ
なり風枝末さたまらす鳥のすむ事
かたしと云事もけにとおほえてほ
りかねの井箱根の池霞の関すみた」（34ウ）
河名をえたる所はおほししかもうら
らかなる春の日はかしこへ行てうれへを
のへさしもしうしんふかきにはにたれと
もなにはの事かのりならぬとて廿
九^ノ年さまをかへしよりこのかたは
きをみなへしにとゝめられて此所に
庵りをむすひ身をかくす事六十

余年也この程ことなるつとめは
なければとも我君にめしつかはれし
より一乗妙法をたのみ奉る心さしあ」（35オ）
さからすしてこの所にすみしよりこの
かた法華十軸の読誦七万八千余部也
とかたるに郁芳門院の昔の御事お
もひやられてあはれにあはれをそへ
苔のたもともくちはてぬへくそおほえ
けるそもく朝夕の御衣食はいかにと
いひければをのつから人きゝつたへて
時々とふらふ事もありさらぬ時は
むなしう日ををくり侍れともいたみ
ともおほえす十四五日もむなしければ」（35ウ）
時ゝ童子きたりて雪のやうなる物を
口にあつれば心ゆたかに物ほしからず
くらき夜は火をとほさねともひかりかゝ
やくおほかたはむなくてのみ日をを
くれともあななちにいたみともおもはす
わつかにかたまはかりの庵りなれとも
これにてけふりたてん事はこと
さらなさけなくおほえていとなむ事事も
なき也とそかたりける岩蔵の成尋
阿闍梨と云人の法花三昧を成就し」（36オ）
てましゝけるにこそ天の童子つねに

来りて朝夕給仕し給けるとはいへとも
後五百歳の遺詔ありかたくおほえて天
諸童子以為給仕といへる事思ひあは
せられて我身も数ならすそおほえ
ける時をうつしひさしくもあらはいふ
せき事にもや思はれん心なきかたもこそ
あれとて立帰り袂に月やとりて思ひ
あへぬ程なれは

秋はたゝこよひ一夜の名なりけり」(36ウ)

おなし雲ゐに月はすめとも

いかにわれきよくくらぬ身と成て

こゝろの月のかけをみかゝん

いかゝすへき世にあらはこそよをもすてゝ

あなうのよやとさらにおもはめ

しけき野をいくひとむらにわけなして

さらにむかしをしのひかへさん

玉にぬく露はこほれてむさし野の

草の葉むすふ秋のはつ風

かそへねとこよひの月のけしきにて」(37オ)

秋の中をは空にしるかな

みやこにてむさし野ゝ秋のけしき花の色

むしの声つたへ聞しには猶すくれた

りか程もありける事よとおほえて

この所にていほりをもむすひてなん

と思ひけれともあつまの方もさすかに
心にかゝりければ立出ておくのかたへくた
りけるか白川の関室にとゝまりて
ありけるに所からにや月のひかりこと
にさやけくおほえてさては能因入道か」(37ウ)
都をは霞とともに出しかと秋風そふく
白河の関とよみけるもことはりとおほえて
関室のはしらにかくなん

しら川の関室に月のもるかけは

人のこゝろをとむるなりけり

つきの日関山をはるゝとこえ行程に

七たひくもり八たひはるゝとかやの心地し

て時々あめうちふりて物あはれしけに

ありければ

たれすみてあはれしるらん山里の」(38オ)

あめふりすさむゆふくれの空

あるくれに人里もなかりければ木の本

にやとをしめて都の事もおもひ

出られて

うき世にははかなかりける秋の月

なかむるまゝに物そかなしき

月の色に心をきよくそめましや

みやこをいてぬ我身なりせは

関^をの立て五六日はかりに成けるには

るかなる野中にやとをとりくまなき」(38ウ)

月をえいして都にてのなかめは数にも

あらずおほえてさても月みむたひに

たかひに思ひ出むと契し人の事も

おもひ出られて

みやこにて月をあはれとおもひしは

かすにもあらぬささひなりけり

月見はと契りをきてし古里の

人もやこよひ袖ぬらすらん

不慮の外の事によりて南都の大

衆おほく奥へなかれてありけるに」(39オ)

中蹲(マ)と云所にて行あひて都の物語を

しけるにをのゝ涙をなかつ行末も

しらすなかされて跡もとゝめぬ身なれ

ともこの世の中にあらんほとはおなし

都の人にもめくりあひけり黄泉の旅

におもむきなん後にこそ無量劫ををく

るとも此世の人にゆきあひて古里の

事をも聞思ひをのふる事もある

ましけれと思ひて彼蘇武か漢帝の

使として胡国のものゝふにとられ」(39ウ)

て十九年の秋をまちて南にかける

雁のつはさに書をたつさへて河梁に

のほる遊子日くれていつくにか行といひ

つゝうれへの色をあらはしけんも我身

の上とおほゆる也とて涙をなかしけり

さて遠き国にておもひをのふると云事

をよめるなり

なみたをは衣川にそなかしける

ふるみ(マ)やこをおもひ出つゝ

今しはらくの程もこれにて昔今の事」(40オ)

をもたかひに申ひらかんとてとゝめけれ

ともうき事きかぬかたをたつねん

とおもふなりとたはふれつゝたちいて山

路はるかに入けるか

しをりせてなを山ふかくわけいらん

うき事きかぬところありやと

あつまちのしのふの里にやすらひて

なこそその関をこえそわつらふ

つほの石ふみ沼のたてゆりせん(ママ)ふく

の事からあはれにおほえて見行程に」(40ウ)

ある野中をすきけるにつねよりも

事ありかほなる塚の見えけるを行あ

ひたる人にあのつかをは何と申そと

とひければ中將のつかとはこれか事也

と云中將とはたれか事そと又とへ

は歌よみの中將実方の朝臣の御は

か也とひけれ(ママ)はいとゝあはれにお

ほえて此中将の賀茂のまつりの舞
人にさゝれて舞の時みたらし川

にうつる影をみて我身なからも我」(41オ)

身とおほえすとよみたまひし人そ

かし院中の女房たちもこの人によ

くく心をつくしてや思ひけん誓言に

は実方の中将にくまれかふらんとそい

はれけるしかりといへとも南閭浮提のさ

ためなきならひにてすみなれし

都をよそに見てはるかなるあつまの

野辺のおはなかもとにくちけん事の

かなしくおほえてこのありさまを見る

につけてもひとへに我身のうへに」(41ウ)

つもる心地してさらぬたに霜かれのす

すき心ほそく後かたらんもことはもな

き心地して

くちもせぬその名はかりをとゝめをきて

かれ野のすゝきかたみにそみる

はかなしやあたに命の露きえて

野辺にやたれもをくりをかれん

いつか我ふるきそとはのかすに入て

しられすしらぬ人にとはれん

あくろつかるゑひすか島の事からしのふ」(42オ)

のこほり衣河いつれをわきてなかむへし

ともおほえすしてすぐる程に鎮守府
の將軍秀衡とて出羽陸奥国両国を

したかへて平泉と云所にすみかをとめ

て逸者にてそありけるかしこへ尋行

人つてならて申たき事ありと

いはせたりければ秀衡悦て対面し

申けるは我生を辺鄙のあさましき

国にうけたりといへとも吾国のもてあ

そひなれは大和詞をくちすさむ事」(42ウ)

なのめならず御事をうけ給はりしに

もあはれつてならてなんとおもひぬる

に此国へ御下ある事の西王母か桃もか

すならすおほえてよろこはしくこそ

思ひ奉けれ秀衡きゝ侍しには枝をよち

て其根をたゝしなかれをくむてみな

もとを尋にうとからぬ御事也其ゆへ

いかにといへは参議房前の五男に左

大臣魚名とておはしけるかおもひの

ほかなる御事にて太宰の権帥にう」(43オ)

つされてちんせいへななされさせ給き

かしこにては河辺の大臣とぞ申ける

延暦二年七月廿五日御年六十一にし

てうせさせ給き魚名より秀郷に

いたるまでは五代也秀郷をは田原藤

太と申せしか相馬小二郎将門と
 云者下総国亭南と云所に都をた
 て次第の官位をさためをき身つから
 平親王といはれて七か年の程都に
 したかひ奉らさりけるに東山東海」(43ウ)
 の武士ともにおほせつけられてせめら
 れけれどもかなはさりければ平の貞盛
 と藤原の秀郷さまくのはかり事
 をめくらしすきにし天慶四年二月
 十四日将門をほろほしかうへを都へ
 奉る此勸賞によりて秀郷はむさし
 の守に給はりてほまれを下毛野押
 領使にふせられ鎮守府の将軍に
 うつり武威を四海にほとこし名譽
 を天下になせりき秀郷に男子五人有」(44オ)
 き中にも四男は相模守五男は鎮守府
 の將軍千常とそいひける千方の子に
 千清とてありき其子に頼遠とて侍
 りき其子に修理権大夫経清とてあ
 りけるか清原の武則か妻かたきに
 てうしなはれき経清か子に清衡なり
 此国の物は奥の御たちとそなつた
 りし栄花身にあまりてありしか武
 則か子息武衡にほろほされき清衡

も男子三人もちてあり嫡子家清此国」(44ウ)
 のものはかたはらいたき事にてありし
 かと香の御料と申き二男基衡三男
 十郎清綱とてありき基衡か子に
 のかすにはあらねとも秀衡かくて侍り
 き秀衡もいふかひなき事にはあれ
 とも男子四人もちてあり一男錦戸の
 太郎国衡二男泰衡三男和泉三郎
 忠衡四男本吉四郎高衡也清綱も大
 田太郎俊衡樋爪五郎 衡とて子息
 二人あり俊衡も行衡兼衡忠衡とて」(45オ)
 男子三人ありをのくの御事をうけ給
 はりしにはさきに申ぬる千常の子
 に鎮守府將軍文修とておはしまし
 き文修に二人子ありき一男左衛門
 大夫文行とてありき母は利仁か娘也
 二男鎮守府の將軍兼光也今の下野
 国の藤原氏の先祖也文行か子に相模守
 公光とてありき公光に男子おほくあ
 りしかとも二男をは伊豆守公清とそ
 いひし其子に一男左衛門太夫康清二」(45ウ)
 男伊豆守得業尋実とて南そたちの
 僧なりき三男公俊とてありしは相模
 国三浦住人駿河守為俊にやうせら

れて姓を平とあらためき四男兵衛太
太夫清兼也さても康清には嫡子にて

おはしますとうけ給はる世々をはるか
にへたてたれとも秀郷のいにしへ

を思へはいまさらなつかしくこそお
もひ奉れなんと云おもはすの外のいにし
への事さへかたりてこの国へ御下候」(46才)

おもひ出に恋の百首をすゝむる事あり

よみて給はらんといいひけれともとかくい

なみ申てよまさりければあなちよ

まぬ事をなけき申けるあひた千

里の浜の草の枕にて見し夢の事も

思ひ出られてわすれかたき事にや思ひ

けんせうくよみてをくりける

たちそめて帰るころはにしき木の

ちつかまつへきこゝ地こそすれ

身をしれは人のとかとおおもはぬに」(46ウ)

うらみかほにもぬるゝ袖かな

くまもなきおりしも人をおもひ出て

こゝろと月をやつしつるかな

あはれとて人の心のなさけあれな

かすならぬにはよらぬなけきを

あふまでの命もかなとおもひしは

くやしかりけるわかなかな

たのめぬに君くやとまつよひのまの

ふけ行てたゝあけなましかは

しはしは平泉にすみ侍りしかとも」(47才)

人しけきすまゐ心よからすおほえて秋の

末に成ていてにけりある山里のはにふ

のこやにやとをかりえてありける夜

きりくすの声うちよはりて物かなし

くきこえければ

きりくす夜さむに秋のなるまゝに

よはるか声のとをさかりゆく

霜うちふりて梢まはらに木の葉おち

かきねのむくらうちかれてきりくすの

物あはれに聞えければ」(47ウ)

霜ふりてむくらのしたのきりくす

あるかなきかの声そきこゆる

都ならねと年のくれにはむつきのし

め^とて我もくといそきあひたりける

事のあはれにおほえて

つねよりも心ほそくそおもほゆる

旅の空にてとしのくれぬる

霜さゆるにはの木の葉をふみわけて

月はみるかととふ人もなし

うき身こそいとひなからもあはれなれ」(48才)

月をなかめて年のくれぬる

年立帰りぬれは四方の梢もたゝならぬ
けしきにて霞とともに都のかたへおも
むき行程にある野中をしめて柳を
めぐりにうへまはして水のほとりには
いとしけう梅をうへておもしろくさかへ
たるしつかわら屋にやとをかり
てとまりたりければ花のにほひ
わりなうて

ひとりぬる草のまくらのうつりかは」（48ウ）

軒はのむめのにほひなりけり

やまかつのかたをかかけてしむる野の

さかひにたてる玉のをやなき

あつまのおくもおほかたはいたらぬ所
なくみめぐりてさすかにいける命なれ

は都のかたも恋しくて古里もたち

かへりたれをたのみて何事をいとな

むへしともなき身のかくまとる帰

事の道すからも身をはちしめけれ

とも卯月のころみのゝ国までのほ」（49オ）

れりさるほとによろつ旅のあはれを

かきあつめつれなくみやこの事も

きかまほしくおほえるか山ほとゝ

きすの声もおしますなきですき

ければ

時鳥みやこへゆかはことつけん

なきくらしたる旅のあはれを

よられつるのもせの草のかけそひて

すゝしくもる

ゆふたちの空」（49ウ）

むかし

みし

野

中の

し水

かはらねは

わが影をもや

おもひ

いつらん」（50オ）